HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	小型捕鯨の文化人類学的考察(2) ： 鮎川浜のケース
著者	岩崎，まさみ
引用	北海学園大学人文論集，28：1-19
発行日	2004-07-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

小型捕鯨の文化人類学的考察(2)：鮎川浜のケース[1]

岩　崎　まさみ

1．はじめに

国際捕鯨委員会（IWC）の商業捕鯨全面禁止（モラトリアム）の決定により，1987年の漁期を最後に，日本各地4カ所にあった小型沿岸捕鯨業者はミンク鯨の捕獲枠を失った。その当時宮城県鮎川浜で小型捕鯨業を営んでいた3社[2]も例外ではなく，網走，和田浦，太地の業者と同様に，捕獲枠の大部分であるミンク鯨の捕獲枠を失った。これらの4地域における小型捕鯨の歴史や地域の捕鯨との関わり方，またモラトリアムの影響，およびその対応策はそれぞれ異なっている。しかしいずれの地域にも共通していることは，それらの4つの地域の人々はモラトリアムの決定から17年が経過した現在でも，モラトリアムが解除され，ミンク鯨の捕獲枠がかつてのように与えられ，小型捕鯨業の操業が正常化することを待ち続けていることである。

日本の小型捕鯨業の特徴を理解するには，小型捕鯨業者間のつながりや同地域で操業する大型沿岸捕鯨業者との関係を検証する必要がある[3]。4つの地域の小型捕鯨業者は連携をとりながら，日本沿岸の捕鯨漁場で操業していることや

1　鮎川浜での調査は1988年から1994年の間行われ，その調査結果はAn Analysis of Social and Cultural Change in Ayukawa-hama（アルバータ大学1994年提出博士論文）にまとめられている。本稿はその1部をもとに鮎川浜における小型捕鯨の発生について分析している。

2　1988年に鮎川浜で小型捕鯨業に従事していた会社は鳥羽捕鯨（第75幸栄丸），奥田・日進水産（会社は個人経営であり，船は日進水産所有の大勝丸）と星洋漁業（第2大勝丸）である。

(Akimichi et al. 1988; Kalland and Moeran 1992; Iwasaki-Goodman 1994)，さらに一つの地域の捕鯨者が他の捕鯨地域に移住し，その結果移住先の地域の捕鯨技術に影響を与えるなど，小型捕鯨業者間のつながりは小型捕鯨の操業形態やその歴史に深く関わっている。また小型捕鯨業の発生は大規模な捕鯨会社が経営する大型捕鯨業の影響を受けていることから，小型捕鯨を大型捕鯨業との関わりで理解することにより，小型捕鯨の特徴を理解し，小型捕鯨が日本の捕鯨の伝統を継承している歴史つながりを考えることが出来る（Kalland and Moeran 1992)。鮎川浜における小型捕鯨はこれらの小型捕鯨の特徴を検証する適切なケースであり，本稿では鮎川浜における小型捕鯨業の歴史的変遷をとらえ，他の地域の捕鯨との関わり，さらに同地域における大型沿岸捕鯨業との関わり，それらが小型捕鯨の発生に及ぼした影響を考える。

1986年以来，IWC年次総会において日本の小型捕鯨業に関する議論が続けられてきたが，問題の打開には至っていない。IWCメンバー国は小型捕鯨の窮状は理解するが，モラトリアムが有効である限りミンク鯨の捕獲枠は決定できないと言う紋切り型の議論を繰り返している。日本政府はこれまでIWCに留まり，内側からIWCを変えようとする努力を続けてきたが，日本政府の意図に反して昨年は新たにConservation Committee設置を求める決議文が採択されるなど，これまで以上に鯨保護の傾向が強まり，捕鯨再開を求める日本政府に残された選択肢が狭められてきている。世界各地で鯨資源の回復が確認されている現在，本稿を通して小型捕鯨業の特質を再検証し，モラトリアムが日本の小型捕鯨コミュニ

3　モラトリアム以前1987年の小型捕鯨の基地と捕鯨地域は付録1に示されている。またモラトリアム以前に，日本で行われていた3種類の捕鯨：小型捕鯨，大型捕鯨，母船式捕鯨は漁業管理上定義され，詳細な管理規定のもとに操業していた。小型捕鯨は小型捕鯨船を用いて日本沿岸で小型鯨類（ミンク鯨，ツチ鯨，ゴンドウ鯨）を捕獲する捕鯨であり，ミンク鯨の捕獲は日本政府によって漁期と漁場が決められ，IWCによって捕獲枠が決められた。また大型捕鯨は陸上の鯨処理場を基地として，日本の沿岸で大型の鯨類を捕獲する捕鯨であり，操業規模や経営企業の規模も小型捕鯨よりはるかに大規模であった。

ティーにもたらした影響を再確認することにより，迅速な問題の解決を求めたい。

2．鮎川浜と小型沿岸捕鯨

鮎川浜は宮城県の東端の牡鹿半島南東部にある牡鹿町の11の集落のひとつである(付録2)。町の中心を流れる湊川には鮎が見られたことから，この地域を鮎川と呼んだと言われている(牡鹿町　1988)。気候は一年を通して温暖であり，最も寒い月の平均気温が2.5℃である。風力は比較的強く，加えて6・7月に見られる霧により，鮎川浜と近郊の島々を結ぶフェリーの航行に混乱をきたすことも少なくない。現在牡鹿町の全人口は5,300人程度であり，捕鯨が盛んだった1960年代にはその2倍ほどだった人口が序所に減少し，1993年には6,700人であり，さらに人口減少に歯止めがかからない。牡鹿町にみられる人口減少は鮎川浜における捕鯨業の衰退を反映している（Akimichi et al. 1988; Iwasaki-Goodman 1994, 2000)。鮎川浜から最も近い都市である仙台は，鮎川浜から約85キロメートルの距離があり，JRとバスを乗り継いで行き来することが出来る。都市から鮎川浜まで来る人々の多くは鮎川からフェリーで行く金華山への参詣を目的とするが，仙台からの道のりは峠路や屈曲が多い。この山道を整備し，昭和46年(1971年）にコバルトラインが開通したことにより便利になったものの，一般的な観光地への交通に比較すると，はるかに困難な道のりである。

牡鹿町のはじまりは明治22年（1889年）であり，その年に行われた町村制施行により，それまでにあったいくつかの集落が統合され大原村と鮎川村となった。のちに町制を経て1955年に大原町と鮎川町が合併され，現在の牡鹿町が誕生した。町政を司る牡鹿町役場は鮎川浜に置かれ，初代の町長には鮎川浜の鈴木良吉氏が就任した（牡鹿町　1988)。

「浜」と呼ばれる小区域は，昔からある集落の単位である。近海の豊な魚資源に恵まれ，牡鹿半島の各地域では漁業に依存した町作りが行われてきたが，その中でも鮎川浜では，他の地域にはない地理的条件に恵まれたことから捕鯨業が定着し，他の浜とは異なった経済，社会・文化的特質を強めてきた（Akimichi et al.

1988; Iwasaki-Goodman 1994, 2000)。牡鹿町における捕鯨の歴史を語る上で，「浜」という地理的単位が重要な意味を持つことは，『牡鹿町誌』(1988)でも強調されている。同誌は牡鹿町内には11の「浜」があり，それぞれの「浜」において特徴のある社会・経済・文化活動が認められることを指摘している。それは地理的にもそれぞれの「浜」が他から分離し，それぞれの地理的条件に合わせて現在みられる社会・経済・文化的な特徴が生まれたとしている。捕鯨の発展は鮎川浜に集中して見られ，鮎川浜を中心とした産業として定着したことから，地域の人々は捕鯨と鮎川浜の深い関係を「捕鯨の鮎川か，鮎川の捕鯨か」という表現をよく用いて現す。

捕鯨業は鮎川浜を中心として発展してきたが，鯨の流通や消費の範囲は鮎川浜からさらに広く近隣の地域に広がっている。血縁関係のネットワークは鮎川浜の隣の十八成浜やその他の9つの浜を含めて広く認められ，鮎川浜を含む社会ネットワークが鮎川浜を越えて，さらに広域に渡っている。それゆえに鮎川浜を中心とした捕鯨文化の広がりもそれに準じ，鯨の贈答や鯨食文化は社会ネットワークを通して，広域に広がっていると言える。これらに加えて，明治時代にこの地域に捕鯨業が根づいて以来，町役場や地元の漁業協同組合は捕鯨活動に大きな影響を与えてきた。これらのことから，「鮎川浜捕鯨コミュニティー」を一地域に限定することは難しく，鮎川浜を中心とした捕鯨はその重点を地域に置き，放射線状に多方に広がっていくことに留意しつつ，鮎川浜の小型捕鯨の歴史を捉えていく。

『牡鹿町誌』(1988)によると，鮎川浜地域に人が住んだ痕跡は縄文時代にまでさかのぼること記録されている。その後の13世紀には，鮎川浜で金の採掘が行われたことから，この地域に人々が住んだことが予測できるが，それを証明する遺物は発見されていない。鮎川浜に人が住んだと思われる最も古い痕跡は14•15世紀のものと見られる供養碑である。この供養碑は鮎川浜の観音寺と薬師堂に建てられていることから，この時代に鮎川浜に集落があったことが解る。これらの供養碑を建てたのは誰であるは不明であるが，この時代の人々が宗教的儀礼を行ったことは明らかである。

鮎川浜で集落が拡大したのは1644年頃である。仙台藩は太平洋側から外国船

が侵入することを監視するために5つの番所を設けたが，その一つが鮎川浜に設置されたことに伴い，番人などが鮎川浜に移住してきたとある（牡鹿町　1988)。その後金華山の黄金山神社への参拝者などが鮎川浜を拠点として，行き来したことなどの記録があるが，実際に鮎川浜に人々が集落を構え，町としての賑わいを見せるようになるのは，明治時代に大型の捕鯨会社が鮎川浜に基地を設けるようになってからである。

鮎川浜における近代捕鯨の時代

金華山沖には豊富な鯨資源があり，明治時代以前にも仙台藩により鮎川浜地域において捕鯨が試みられているが，それらの試みが実を結んだのは明治時代に入ってからであった。明治時代に入り，いくつかの捕鯨会社が鮎川浜に捕鯨基地を設立したことにより，鮎川浜における近代捕鯨の時代への扉が開いた（牡鹿町1988)。その中には明治39年(1906年)に設立した金華山漁業株式会社のように，母船から降ろした数隻の捕鯨ボートから人力で鯨に銛を打ち込んで捕獲するアメリカ式捕鯨法を用いた会社を始め，いくつかの捕鯨会社が金華山沖の鯨資源を求めて操業を開始した。

鮎川浜において捕鯨業が有望であることが知られるに至り，大規模な大型捕鯨会社が鮎川浜に進出してきたが，そのさきがけとして明治39年（1906年）に東洋漁業株式会社が鮎川浜に捕鯨基地を設けた(前田　1943)。東洋漁業株式会社は明治37年（1904年）に山口県下関において創立した捕鯨会社であり，東洋漁業捕鯨会社の進出は鮎川浜の人々の間に様々な反応を引き起こした。村長を始めとする地域リーダ達は捕鯨業が鮎川浜の基幹産業になりうると考える一方，漁民たちは鯨の解体が海を汚染するなどの漁業に及ぼす影響を心配して捕鯨業の進出には慎重な態度をとった。その当時の鮎川村長である和泉恒太郎は鮎川浜の将来にとって捕鯨業は重要であると考え，捕鯨誘致のために村民への説明を行った事実が『牡鹿町誌』(1988）に記録されている。

東洋漁業株式会社はその当時日本に紹介された「ノルウエー捕鯨法」を採用し，捕鯨砲を用いて大型鯨類を捕獲するという新しい捕鯨方法を試みた（前田1943)。この捕鯨法が成功したことにより，数年のうちに，さらに土佐捕鯨，紀伊

水産，藤村捕鯨，長門水産などの捕鯨会社が金華山沖の捕鯨漁場を目指して，鮎川浜に捕鯨基地を設けた。これらの捕鯨会社の進出により，鮎川浜には鯨加工業などの捕鯨関連産業に加え，鯨工芸品店や運輸業なども増え，鮎川浜とその近隣の地域は活気を増して行った。67世帯の漁民の集落であり牡鹿半島のその他の浜と同等の規模の集落であった鮎川浜が，明治39年（1906年）に大型捕鯨会社が鮎川に進出した5年後には世帯数は約3倍となり，149世帯が記録されている。この人口増加は他の地域から捕鯨のために移住してきた人々によるものであり，そのことはその後の鮎川浜における経済・社会・文化的発展に重要な影響を及ぼした。

地域外から鮎川浜へ進出してきた大型捕鯨は地域経済を活性化しただけではなく，鮎川浜の地元に根ざした新たな産業の発生を促した。その中でも最も成功した新産業は肥料製造業であり，鯨の廃棄物を利用して，肥料を作る試みが，和泉恒太郎によって始められた(牡鹿町　1988)。この試みは鯨の廃棄物による汚染の問題を解決すると同時に，肥料製造という新たな産業として地域の経済の活性化に貢献した。肥料製造業は地域住民の注目を浴び，1919年には28社の肥料会社が鮎川浜と十八成浜において操業を開始した。さらに捕鯨会社が支払う種々の税金は自治体の財源となって，地域経済を潤した。これらの経済的な効果に加え，捕鯨に関わる人々が多く鮎川浜に移住してきた。これらの人々は和歌山や長崎などの捕鯨基地からの出身者が多く，その地域に育った長い捕鯨文化の伝統を鮎川浜の人々へ伝える役割を果たした。この時期に伝えられた捕鯨文化は，後に発展する鮎川浜における沿岸捕鯨文化の基盤となったことは言うまでもない。

小型捕鯨の始まり

鮎川浜に展開した大型捕鯨業は地域の発展を願う地元住民に強い刺激を与えた。大正14年（1925年）には和泉恒太郎を中心として鮎川浜の住民たちが鮎川捕鯨株式会社を設立し，外部資本による捕鯨ではなく，地域に根ざした捕鯨を始めた(牡鹿町　1988)。その一方，鮎川浜が捕鯨にのみ過重に依存することを懸念する地域リーダたちの中には，漁港を改修することにより，捕鯨以外の漁業の発展を目指す者もいた。昭和3年と4年（1928･29年）の世界恐慌の影響は鮎川浜

にも及び，捕鯨の不漁，さらに鯨油供給超過によりその輸出が止まるなどの悪条件が重なり，それまで鮎川浜の捕鯨産業の中核であった大型捕鯨業は次第に衰退して行った。この時期に鮎川浜の大型捕鯨基地が閉鎖されたことによる失業者の数は200人と言われている（Iwasaki-Goodman 1994, 2000）。当然鮎川浜に及ぼした影響は大きく，地域の人々に強い衝撃を与えた。

鮎川浜における捕鯨産業は第二次世界大戦後に再び盛んになった。日本全国で戦争による食糧難が深刻になり，鮎川浜の沿岸捕鯨業はその問題に対応するために，食糧供給という重要な役割を果たすこととなった（牡鹿町　1988年；Iwasaki-Goodman 1994, 2000）。加えてこの時期には，国民への食料供給のために南氷洋での捕鯨が始まり，鮎川浜で大型沿岸捕鯨を経験した人々の多くが捕鯨船乗組員として採用された。このことにより鮎川浜の人々は沿岸捕鯨に加えて，遠洋捕鯨にも深く関わることとなった（前田　1943；牡鹿町　1988）。1952年には鮎川浜に基地を持つ捕鯨会社の一つである日本水産が女川へ移転し，沿岸捕鯨から遠洋捕鯨への転換を決めた。また鮎川浜では海苔の養殖業が始まり，産業基盤を拡大する動きが始まった。この頃に鮎川浜の人々は「鯨祭り」を初めて開催し，地域全体が参加する祭りを通して，捕鯨業に依存する鮎川浜を「鯨の町」として象徴的に位置づける行事を開催した。この年以来「鯨祭り」は現在に至るまで催されている。

小型捕鯨船は鮎川に基地を持つ大型捕鯨船には許可されていないミンク鯨を捕獲することから「ミンク船」と呼ばれている。鮎川以外の地域に本社を持つ大型捕鯨会社の場合とは異なり，小型捕鯨業の発祥は鮎川浜である事は小型捕鯨の特質を理解する上で重要である。ミンク鯨の捕獲を最初に試みたのは太地から鮎川に移り住んだ長谷川熊蔵であり，長谷川はかつて大型捕鯨船で船長として仕事をした経験を持つ人だった。長谷川は太地から第一勇幸丸という小型船を持ち込み，太地のゴンドウ鯨漁に用いられる20ミリメートルの5連装とノルウエー製の26ミリメートル捕鯨砲を取り付けて，昭和8年（1933年）に試験操業を行った（牡鹿町　1988：Akimichi et al. 1988）。ミンク鯨漁が始まった初年度の捕獲頭数は10頭に過ぎず，その当時のミンク鯨の肉や脂は他の大型の鯨に比較して商業的価値が低いことから，その年の業績は振るわなかった。その次の年に第一

勇幸丸は鮎川の実業家に売却され，同時にミンク鯨漁のためにデザインされた第二勇幸丸が造船され，操業を開始した。この船が最初の「ミンク船」であり，後に続く鮎川浜の小型捕鯨の始まりを印した。

1941年に第二次世界大戦が始まると，大型捕鯨船は次々に軍事的目的に転用され，一方小型捕鯨船は地域の食料供給のためにさらに重要な役割を果たすようになっていった（Akimichi et al. 1988; Iwasaki-Goodman 1994, 2000）。その当時，鮎川浜には3隻の小型捕鯨船があった。1944年に戦争が激化するにつれて，日本政府は食料供給に力を入れ，食糧難に対応するために小型捕鯨船にマッコウ鯨の捕獲枠を許可した。この特別許可のもとでマッコウ鯨を捕獲するには，日本政府の管理のもとで設立された漁業統制会社を通して操業しなければならない条件があり，それらの条件を満たして，従来の小型捕鯨船3隻と新たに小型捕鯨に参入した船を含めて，全国で13隻の小型捕鯨船が操業した。

第二次世界大戦中には小型捕鯨業は鮎川浜から女川などにも拡大して行った(Akimichi et al. 1988)。そして戦後の深刻な食糧難により，食糧確保が重要課題となった時代には，小型捕鯨業がさらに拡大し，全盛期には全国に約70隻の船が操業した。鮎川浜にある5隻の小型捕鯨船は2月から6月まではミンク鯨を捕獲し，その他の期間はマッコウ鯨やゴンドウ鯨を捕獲した。1947年に日本政府は小型捕鯨業者に対して許可制を導入して産業の育成と資源の保全を始めた。この制度により，小型捕鯨船は30トン以内であること，また捕獲鯨種を限定すること，さらに小型捕鯨業の許可を一年ごとに更新するなどの規制が設けられた。新しい許可制度の導入により，小型捕鯨業はマッコウ鯨を捕獲することができなくなった。またこの時を前後して，戦地から帰還した大型捕鯨船が補修を終えて捕鯨に復帰してきたことにより，小型捕鯨業にとって不利な状況が生まれてきた。

鮎川浜の小型捕鯨業者は，大型捕鯨業に対抗するための戦略として，この時期にこれまで捕獲対象ではなかったツチ鯨の捕獲に乗り出した。鮎川浜の捕鯨業者の中には砲手としての経験が豊富な人もいて，ツチ鯨の捕獲は成功し，徐々に他の小型捕鯨業者もツチ鯨の捕獲へと操業を拡大し，経済的基盤を確保していった。ツチ鯨漁の成功により，小型捕鯨業に進出する人が増え，1952年当時は鮎川浜には10隻の小型捕鯨船があったとの記録があるが，1957年には10社で13隻

に増えたと記録されている（牡鹿町　1988)。

1960年代には捕鯨に復帰した大型捕鯨業者との競合により，鯨油や鯨肉の価格が下落していった（牡鹿町　1988)。操業の合理化を目指す日本政府は，1967年には小型捕鯨許可を集約して大型捕鯨許可へ転換する政策をとったことにより，小型捕鯨業船の数は激減し，1970年代には鮎川浜の小型捕鯨船は3隻に減ってしまった。それに対し小型捕鯨業者は経営難を食い止めるために，捕鯨技術の改善を試み，1971年頃から小型捕鯨船に加えて鯨の移動方向を操作するためにモーターボートを用いることを考えた。その結果の操業能率の向上は目覚ましく，このような技術改善に加えて，鯨市場が小型捕鯨業に有利に変わっていったことから，小型捕鯨業は経済的に安定して行った。

鮎川浜における捕鯨の歴史を振り返ると，小型捕鯨業の地域性の高さを説明する要因が明らかになる。鮎川浜における小型捕鯨業は地域外から持ち込まれた捕鯨技術や移り住んだ捕鯨者の経験が鮎川浜の住民に受け入れられ，それらの捕鯨技術や経験がさらに地域の人々の独創性によって加工され，新たな捕鯨業として内発的に生み出された産業である。鮎川浜に東洋漁業会社が進出し，ノルウエー式捕鯨技術を用いた捕鯨業を展開させた明治末期以来，沿岸で大型鯨類を捕獲する技術を目の当たりにした鮎川浜の人々は，その約20年後の1925年には肥料製造のためにマッコウ鯨を捕獲する鮎川捕鯨会社を設立している。その後1932年には太地の捕鯨者が持ち込んだ小型鯨類を捕獲する技術を，ミンク鯨の捕獲に用いることにより，大型捕鯨会社が捕獲していないミンク鯨を捕獲対象とする小型捕鯨を始めた。その後第二次世界大戦の食糧難に対応すべく南氷洋での遠洋捕鯨が始まり，鮎川浜の人々が乗組員として参加するなど，地域と捕鯨のつながりはさらに深まった。一方沿岸捕鯨では，小型捕鯨業者は大型捕鯨との競争に苦しみつつ，さらにツチ鯨漁という新たな鯨種を捕獲することにより難局を乗り切り，その後小型捕鯨の全盛期を迎えた。小型捕鯨業の歴史の中で，中心的役割を果たす人々は地域の人々であり，それらの人々が外から持ち込まれる新しい考えや技術，さらに外から入ってくる人々の経験などを積極的に取り入れてきたことにより生まれたのが小型捕鯨業であると言える。

捕鯨業の衰退

鮎川浜での鯨の水揚げ量は1924年以来比較的安定し，地域の人々の間でも，捕鯨は安定した産業であるという認識がある。しかしその様相が急激に変化する出来事が1972年に起きた。その状況を『牡鹿町誌』で以下のように記録している。

> 1972年6月，北ヨーロッパにあるスウエーデンの首都ストックホルムにおいて，114カ国の代表1,200人が参加して国連人間環境会議が開催された。この会議において，やがて鮎川浜の死命を制することになる「商業捕鯨の10年間禁止」が採択され，国際捕鯨委員会に勧告された。
>
> (牡鹿町　1988：188)

国際捕鯨委員会（IWC）において大型捕鯨の年間捕獲枠が縮小されたことは，鮎川浜の人々にとり，鮎川浜における捕鯨産業の終焉の兆しであった。その頃から，地域の人々は将来に起こりうる商業捕鯨の禁止を懸念して，地域の行政機関に働きかけるようになり，それを受けて牡鹿町長を中心とした代表団が上京し，外務省や水産庁に窮状を訴えた。このような努力が重ねられた1970年から1986年の間，牡鹿町長を務めた渡辺諭氏は，自らが小型捕鯨船に乗る捕鯨者だった。渡辺は日本政府に対し，繰り返し商業捕鯨の全面禁止が地域にもたらす影響が深刻であることを訴え，その影響により町の存続が危ぶまれることを警告した。

1982年についに国際捕鯨委員会が商業捕鯨の全面禁止を採択した。その時の様子を『牡鹿町誌』では以下のように書いている：

> ここに至って明治39年（1906年）の東洋漁業の進出以来，捕鯨に生き捕鯨で栄えてきた鮎川浜の80年に渡る捕鯨の歴史は閉じられることになったのである……52年（1977年）の3月，鮎川浜には装いも新たに新鯨博物館が完成していた。翌々54年には待望の南三陸金華山国定公園の指定が行われ，町は観光と沿岸捕鯨によって21世紀に向けて生き延びる道を選択した矢先であった。残念ながら今や国の決定に従い新しい道を選択しなければならないのである。

（牡鹿町　1988：189）

商業捕鯨全面禁止の決定は地域経済に多大な影響を及ぼしたことは言うまでもない。1985年のデータによると，当時の全労働人口である1,596人のうち，ほぼ半数が漁業に従事している（Iwasaki-Goodman 1994, 2000）。漁業に関連した職業に就く人々の数を加えると，この数字はさらに多くなる。牡鹿町で行われている約30種類の漁業の中でも，捕鯨業は牡鹿町が創立した1906年以来，最も安定した基幹産業である。さらにその当時，牡鹿町漁業協同組合における全体の売り上げの半分以上を占めているのが小型捕鯨業に関連した売り上げである。

商業捕鯨全面禁止の決定以降，1987年には大型捕鯨の操業は終了し，同じ年に小型捕鯨は捕獲枠の大半を占めるミンク鯨漁を中止した（Akimichi et al. 1988）。大型捕鯨の操業停止に伴い，日本政府はその損害を部分的に補塡するための処置をとった。しかし小型捕鯨業は異なった道を選択した。鮎川浜の小型捕鯨業関係者は牡鹿町の住民であり，これらの人々は小型捕鯨が地域にとって経済，社会・文化的に重要である事を確信し，捕鯨業を廃業しないと決定した。小型捕鯨業者はミンク鯨捕獲枠の復活を期待して，小型捕鯨の許可を保持し，その後も毎年更新し続けた。つまり鮎川浜では小型捕鯨業を廃業する者がいなかったことから，小型捕鯨は捕獲枠の大半を占めるミンク鯨の捕獲枠を失うことに対する政府からの補償はなかった。渡辺町長の後を1987年に引き継いだ安住重彦町長は，捕鯨業の衰退によって引き起こされた社会・文化・経済的影響，それから派生した問題に直面し，牡鹿町の再興という困難な仕事を引き継ぐこととなった。

1988年の捕鯨シーズンから，小型捕鯨業者はIWCの決定に従い，ミンク鯨漁を中止し，他の地域の小型捕鯨船との共同操業を行うことにより，操業する船の数を減らし，操業の合理化を計った（Akimichi et al. 1988; Iwasaki-Goodman 1994, 2000）。ミンク鯨漁を失った小型捕鯨船は，国内管理しているツチ鯨とゴンドウ鯨を捕獲することにより生計を立てることとなった。1990年の秋には鮎川町にホエールランドと呼ばれる新しい博物館が建設され，捕鯨業の損失を観光業により補塡しようとする事業が試みられた。牡鹿町関係者はホエールランドの開設だけで，観光客を誘致することを望めないことを知りつつ，新たな観光施設を持

つことにより金華山への観光客が，数時間でも長く鮎川浜で過ごし，そのことにより鮎川浜の飲食店や商店，ホテルなどが潤うことを期待していた。一方，ミンク鯨漁の再開を求めた努力は多方面から続けられた。1989年以来，牡鹿町の代表団はIWC年次総会に出席し，小型捕鯨業の正常化の必要性を訴えつつ，小型捕鯨の社会・文化・経済的重要性の理解を求めている。

3．鮎川浜における小型捕鯨の社会・文化的重要性

1986年にスエーデンのマルモで行われたIWC38回年次総会において，日本政府は小型捕鯨の実態を説明する資料を提出した（Government of Japan 1997)。この年以降，日本の小型捕鯨が商業捕鯨でありつつも，大型捕鯨や南氷洋での遠洋捕鯨などと異なった特徴を持っていることを説明するために，日本政府は報告書を提出し，IWCメンバー国の理解を促す努力を続けてきた。それらの資料は日本，カナダ，アメリカなどの国々の社会科学者によって行われる調査を基礎として書かれ，それらの調査のために鮎川浜を始めとした小型捕鯨地域の住民が協力している。これらの調査報告書はIWCに提出されただけではなく，一般図書や（Akimichi et al. 1988; Iwasaki-Goodman 2000）日本政府の出版物（1997）として一般の人々の目に触れることの出来る文献として出版されている。その他に岩崎が修士課程学位論文（1988）と博士課程学位論文（1994）の中で小型捕鯨の社会・文化的重要性を文化人類学的視点からまとめている。網走，鮎川浜，和田浦，太地の4つの小型捕鯨地域における小型捕鯨の社会・文化的重要性に関する文献の詳細は夫々の文献を参照することを勧める。本章では鮎川浜における小型捕鯨の地域性を理解するという目的に限定して，鮎川浜における捕鯨文化を検証する。ただし，本章で取り上げる社会・文化的特徴の多くは4つの小型捕鯨コミュニティーに共通していることを付け加えておく。

鮎川浜の人々は自分たちが住む町を「捕鯨の町」と呼び，地域で行われてきた捕鯨とそこに住む人々の暮らしのつながりの深さを語る。鮎川浜は明治の末に大型捕鯨会社の捕鯨基地が出来たことにより，地域の経済はもとより，人々の生活が大きく変化した。捕鯨関連の人々の移住により，それまであった鮎川浜の社会

構造は変化し，その後捕鯨業を基盤として町づくりが行われてきたことから，捕鯨に関わる多様な社会・文化的要因が地域の人々の生活に組み込まれて，捕鯨を基盤とした社会・文化が育ってきた。鮎川浜の人々がその地域を「捕鯨の町」と呼ぶ思いには，捕鯨と切り離すことの出来ない町の歴史が刻み込まれていると言える。

長い捕鯨の歴史の中でも，小型捕鯨業が鮎川浜に生まれたことは，鮎川浜における捕鯨文化の発展に不可欠であった。大型捕鯨業は鯨を捕獲し解体するまでの行程は鮎川浜で行われたが，その後の流通や消費の主な部分は鮎川浜以外の地域で行われることが多かった。その一方，小型捕鯨業は鯨の捕獲から解体，流通，消費に至るまで鮎川浜を中心に行われ，小型捕鯨業の経済的，社会・文化的要因は鮎川浜の人々の日々の生活に深く浸透していた（Government of Japan 1997; Iwasaki-Goodman and Freeman 1994）。このことから小型捕鯨業は鮎川浜に生まれた地域の産業であると言える。小型捕鯨業は鮎川浜における経済的，社会・文化的ニーズを満たし，地域の食文化において栄養上の役割，さらに贈与交換において象徴的な役割を果してきた。小型捕鯨業の発生により捕鯨業が鮎川浜地域の経済的，および社会・文化的制度において不可欠な役割を果たし続け，地域独自の捕鯨文化が生まれ，その地域文化を基盤として鮎川浜独自の地域アイデンティティーが生まれた（Akimichi et al. 1988; Kalland and Moeran 1992）。これらの視点に立って，捕鯨業を取り巻く社会・文化的要因を「社会ネットワーク」を中心に，鯨を基盤とした贈与交換や鯨食文化，さらに鮎川浜における自然観や鯨との関りなどとの関連を検証する。

社会ネットワーク

鮎川浜には小型捕鯨の鯨の捕獲や流通，消費を通して，様々な社会ネットワークが構成され，それが経済的，社会・文化的機能を果している。これらのネットワークの最小の単位を構成しているのは，捕鯨船に乗り捕鯨作業に直接関わる人々のつながりである。小型捕鯨の生産過程で見られる特徴は，鯨を捕獲する作業に関わる人々が少人数であり，さらにそれらの人々のつながりが親密であることである（Akimichi et al. 1988; Government of Japan 1997; Kalland and

Moeran 1992)。小型捕鯨船の乗組員は5人から8人程度であり，鮎川浜の住民が船主である。乗組員に加えて，工場で鯨の解体を担当する解剖夫やその他の作業員などは，鮎川浜の住民の中から血縁関係などを中心に雇用される。ゆえに小型捕鯨業に従事する人々のつながりはきわめて親密である。この親密さはそれぞれの作業を通してさらに強められ，長い間親密な仲間としてのつながりを維持してきた。小型捕鯨従事者はこのような関係を「血縁を作る」と表現し，実際の血縁関係とほぼ同様に重要であり，小型捕鯨従事者間に特徴的な関係を作る機能を果たす。捕鯨船乗組員と解剖夫，船主の関わりは捕鯨が行われている期間にもっとも頻繁であり，また深い。しかし捕鯨が行われていない期間にも，共通の行事に参加することにより会ったり，相互に訪問しあったり，また贈与交換を通して，相互の交流を継続する。これらの捕鯨船乗組員や解剖夫，船主，そしてそれらの家族は一つの社会集団を構成していると言える。

小型捕鯨船乗組員を中心とした社会ネットワークは，鯨肉や脂の贈与を通して，さらに広く地域の人々の間に広がっている（Akimichi et al. 1988; Government of Japan 1997; Kalland and Moeran 1992）日本社会において物のやりとりや，それより形式化した贈与交換は重要な社会制度であり，日本の社会を特徴づける習慣である（Befu 1974；伊藤他　1984)。鮎川浜では贈与交換制度において重要な役割を果たすのが鯨肉や脂などの産物であり，その象徴的価値の高さにより，鮎川浜における贈与交換に不可欠である。鯨が捕獲され，解体のために陸に引き上げられると，地域の人々が集まり見ている前で，解体を担当する解剖夫や助手たちが解体作業に取り掛かるのが捕鯨の町の光景である。鯨の解体が終わると，鯨肉や脂は地域の漁業共同組合によってセリに掛けられ，市場へと流通する。この行程で商業流通に乗って市場へと売られていく鯨肉や脂の他に，解体に関わった人々や捕鯨関係者に対して鯨肉や脂が分配され，それらはさらに贈与品として第二分配されて地域に流通する。

鯨肉や脂は鮎川浜を中心とした贈答交換に欠かせないものであり，中元や歳暮など一年を通して，捕鯨コミュニティーからその他の人々へ贈答される。日本における贈答の習慣は何時，誰に，何を送るのが適切であるかという複雑なルールによって規定されている。そのルールに従うと鮎川浜を中心に捕鯨コミュニ

ティーの人たちが送る贈答において，鯨肉や脂はもっとも相応しい贈り物である（Akimichi et al. 1988; Government of Japan 1997; Kalland and Moeran 1992）。鮎川浜では鯨が捕れると，乗組員，解剖夫たちとその家族，さらに隣人たちに鯨肉や脂が配られる。その他に公民館や消防署，寺院や神社，子ども会や老人クラブなどの公共的集団にも鯨肉や脂が配られる。鯨肉や脂の分配は初漁祝いなどのお返しとして行われることが多く，このような分配が広域に渡って行われることから，地域の人々は「鯨はもらう物」という表現を用い，鯨肉や脂は他の肉とは異なり，地域の社会ネットワークを通じて流通されている事を表す。

捕鯨に関わる生産や加工，流通などにみられる商業的要因は鮎川浜や牡鹿町全体の地域経済に重要な役割を果たしている。しかし市場に出ない鯨肉や脂が分配されることにより，地域の社会・文化的機能を活性化させているという事実を理解することは重要である。それらに加えて鮎川浜の人々は贈答のために，鯨肉や脂を買い，地方の親戚や友人に送ることも多く，商業流通と贈与交換が不可分である。これらの多様な流通を通して，地域やその近郊に地域に鯨を中心とした食文化が根づいてきた（Akimichi et al. 1988）。

鯨食文化

日本全国で各地に伝わる鯨料理を比較すると，その地域的特色が強いことが解る。つまりそれぞれに地域で好まれる鯨の種類や部位，また好まれる調理方法などが地域ごとに異なる。鮎川浜地域ではミンク鯨が好まれ，地域の人々は鯨肉を刺身用に切り，脂を薄くスライスして，肉と一緒に醤油で食べる。捕鯨の季節には，毎日の食卓に鯨が出されたり，また儀礼の際の会食でも鯨は欠かせない（Akimichi et al. 1988; Government of Japan 1997; Kalland and Moeran 1992; Manderson and Akatsu 1994）。また生の鯨が用意できない季節には，日常の食事に鯨が出されることは少なくなる。さらに鯨料理は地域の病院や学校で出されることも多い。捕鯨が行われていない時期でも，儀礼の際の会食には鯨が多く出されるが，その場合は冷凍保存した鯨が用いられる。鯨肉や脂の消費は捕鯨業を支える基礎であり，鮎川浜においても，捕鯨の歴史とともに地域に鯨を中心とした地域食文化が育ってきた。鯨肉や脂が地域に強く根づいていることを示す表現

として，「鯨が食べられなければ鮎川じゃないね」と地域の人々は言うことが多い。鯨や捕鯨は地域コミュニティーの歴史的発展と深く関連し，多くの場合，鯨は地域の歴史的関りを象徴している。鯨や捕鯨がもつこのような特別な社会・文化的価値観ゆえに，鯨肉や脂が「鮎川浜の名物」とされている。鮎川浜では鯨は栄養上のみならず，社会・文化的に価値の高いものとして認識され，鯨の象徴的重要性は鮎川浜の食文化の重要な部分を占めている。

鯨との関り

小型捕鯨が行われる地域では，捕鯨に関わる祝い事と宗教的儀礼がそれぞれの地域に見られ，重要な行事として行われてきた（Akimichi et al. 1988; Government of Japan 1997)。Akimichi et al. (1988)を始めとする文化人類学者は，日本における自然観や信仰を分析し，そのコンテキストで鮎川浜における複雑な信仰形態を検証し，主に3つの特徴を述べている。一つには鮎川浜でみられる信仰は，日本の一般的地域と同様に，仏教と新道が複合的に混在していることを指摘している。一年を通して，鮎川浜では仏教儀礼と新道儀礼の両方を通して，鯨供養や捕鯨者の安全祈願，豊漁祈願を行う。二つ目の特徴としては，一般的に古くから受け継がれてきた家業を尊び，それを維持していくことを重要と考える考え方が，鮎川浜では捕鯨業に見られること。この地域では捕鯨業が歴史的に重要であったことから，現在の人々の意識の中に捕鯨業を維持し，次世代に伝えていく事が地域の人々の責任であると考えられている（Akimichi et al. 1988; Government of Japan 1997)。第三の特徴として，捕鯨に関わる人々の意識の中に鯨とヒトとの互酬的関係を維持しようとする思いがあること。地域の人々は儀礼を通じて鯨とヒトとの関係を保ち，鯨に感謝し，霊を慰めることにより，鯨を捕獲するという行為を補完しようとする。鮎川浜には3つの寺院と一つの神社があり，捕鯨に関わる人々の多様な儀礼がそれらの場所で行われる。さらに，寺院や神社の他に個人的に家で行う場合や捕鯨船の中で行う儀礼もある。また儀礼によって，一年の決まった時期に一度行われるものや，捕鯨の季節には毎日行われるもの，また鯨が捕れた時に行うもの，また集団で行うものなど，多様な形式が見られる。

4．おわりに

大規模な捕鯨会社による大型鯨類を捕獲対象とする沿岸捕鯨の影にあり，その実態や歴史的経過が知られることのなかった小型捕鯨業は，「商業性」を持つゆえに「商業捕鯨」であるとする単純な理論のために，1988年以来ミンク鯨漁を禁止されている。鮎川浜の人々は鮎川浜に基地を持つ大型捕鯨に刺激を受け，また他の地域の捕鯨者から小型鯨類を捕獲する技術を学び小型捕鯨業を始め，さらに積極的に地域経済に貢献するべく「商業性」を高め，ついに小型捕鯨業は牡鹿町の将来を託される基幹産業としての地位を確立した。小型捕鯨には鮎川浜の人々にとり，その経済的貢献に加えて，さらに重要な意味を持っている。それは小型捕鯨の社会・文化的重要性であり，小型捕鯨は鮎川浜の人々の生活に深く根を下ろし，人々の日々の生活とは切り離すことのできないことである。これらの社会・文化的重要性ゆえに地域の人々は鮎川浜を「捕鯨の町」と自負する。鮎川浜の捕鯨の歴史を検証することにより，地域の指導者たちの積極性や独創性により内発的に発生してきた小型捕鯨が地域において果たす役割が見えてくる。これらの小型捕鯨の特徴を再確認し，鮎川浜において小型捕鯨が本来の経済，社会・文化的役割を再び果たす日が近いことを望む。

文献一覧

Akimichi, et al. 1988. *Small-type Coastal Whaling in Japan: Report of an International Workshop*. Boreal Institute for Northern Studies, Occasional Publication No. 27. Edmonton. Report IWC/40/23. International Whaling Commission, Cambridge. 1989年に海鳴社から『鯨の文化人類学』として日本語訳

Befu, Harumi. 1974. Power Exchange Strategy of Control and Patterns of Compliance in Japan. *Asian Profile* 2 (6): 601-22.

Government of Japan. 1997. *Papers on Japanese Small-type Coastal Whaling: Submitted by the Government of Japan to the International Whaling Commission 1986-1996*.

伊藤幹司，他．1984年『日本人の贈答』東京：ミネルバ書房

Iwasaki, Masami. 1988. *Cultural Significance of Whaling in a Whaling*

Community in Abashiri. M.A. Dissertation. Department of Anthropology. University of Alberta, Edmonton.

Iwasaki-Goodman, Masami 1994. *An Analysis of Social and Cultural Change in Ayukawa-hama* (*Ayukawa Coastal Community*). Ph.D. dissertation, Department of Anthroplogy, University of Alberta, Edmonton.

Iwasaki-Goodman, Masami. 2000. *The Ayukawa-hama Community of Japan*, *In Endangered Peoples of Southeast and East Asia*, ed. by L.E. Sponsel, pp. 69-89. Greenwood Press.

Iwasaki-Goodman, Masami and Milton M. M. R. Freeman. 1994. Social and Cultural Significance of Whaling in Contemporary Japan: A Case Study of Small-Type Coastal Whaling. In *Key Issues in Hunter-Gatherer Research*, ed. by E.S. Burch, Jr. and L.J. Ellanna, pp. 377-400. Oxford: Berg, 1994.

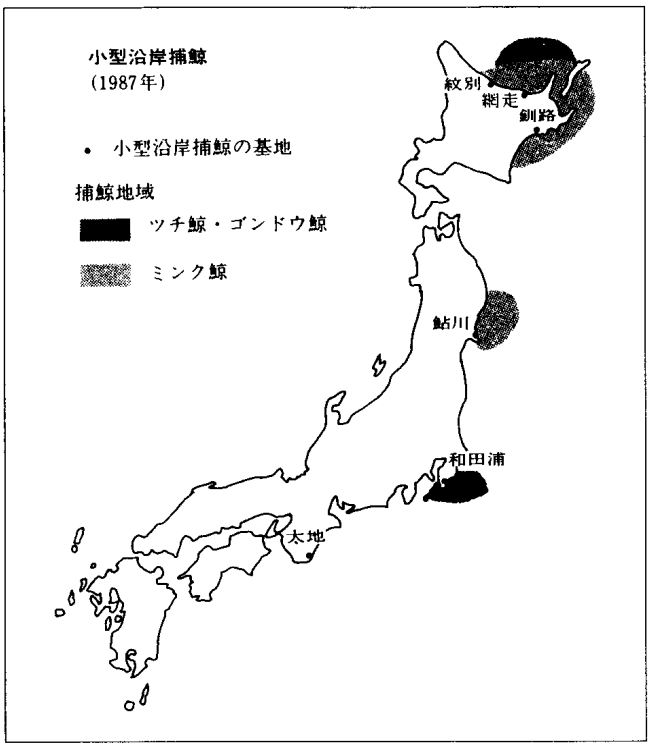
Kalland, Arne, and Brian Moeran. 1992. *Japanese Whaling*: *End of an Era*? London: Curzon Press.

前田敬治郎，他．1943年『捕鯨』東京：水産週報社

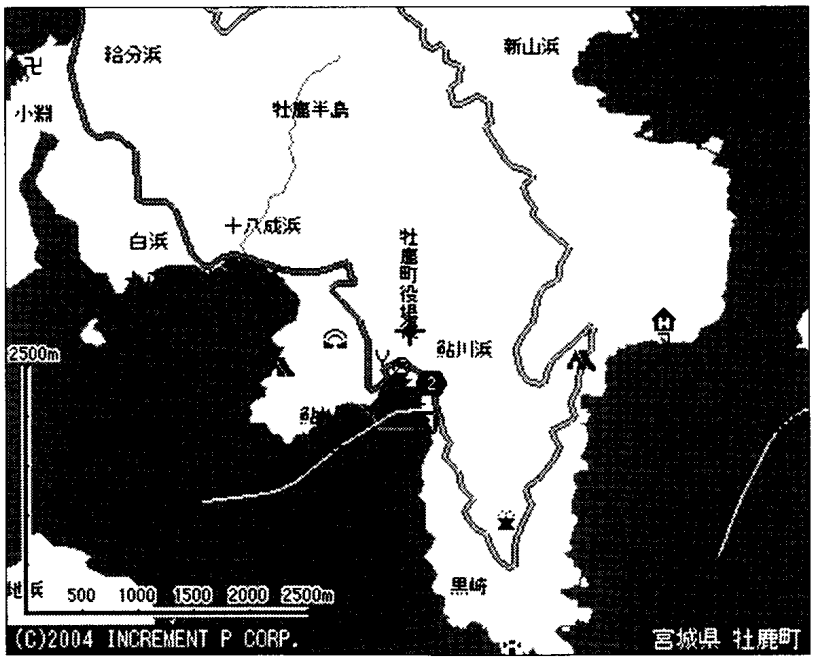
Manderson, Lenore and Haruko Akatsu. 1994. Whale Meat in the Diet of Ayukawahama Villagers. *Ecology of Food and Nutrition* 30: 207-220.

牡鹿町　1988年『牡鹿町誌』

付録 1


小型沿岸捕鯨
(1987年)
• 小型沿岸捕鯨の基地
捕鯨地域
ツチ鯨・ゴンドウ鯨
ミンク鯨
紋別
網走
釧路
鮎川
和田浦
太地

付録 2


給分浜
新山浜
小淵
牡鹿半島
白浜
十八成浜
牡鹿町役場
鮎川浜
2500m
500 1000 1500 2000 2500m
黒崎
(C)2004 INCREMENT P CORP.
宮城県 牡鹿町